

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：34443

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2016

課題番号：26301037

研究課題名(和文) PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革

研究課題名(英文) The Policies for Improving Scholastic Achievements and the Reform of Educational Methods in Germany after PISA

研究代表者

久田 敏彦 (Hisada, Toshihiko)

大阪青山大学・健康科学部・教授

研究者番号：70135763

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：国家レベルだけではなく、連邦制をとっているドイツの事情を考慮して、東・西・南・北のそれぞれの州・地域における学力向上政策と教育方法改革の内容とそれらの具体化を調査した。その結果、「教育の質保障」「コンピテンシー志向の授業」「インクルーシブな授業」の三者の融合を確認するとともに、アウトプット重視による実証主義的な転回の実相、テスト開発や外部評価のありよう、コンピテンシーの評価やよい授業の基準の中身、コンピテンシー志向の授業の展開特徴、インクルーシブ授業における個別化の傾向、コンピテンシー志向の授業とインクルーシブ授業との接合内容など、を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：In consideration of the federal system, we investigated the policies for improving scholastic achievements and the reform of educational methods in each state of Germany after PISA. As a result, we clarified the following;

1. tripartite fusion of "qualitative securing of education", "competency-based lesson", "inclusive lesson",
2. influence of "positivism-turn", where output is taken very seriously,
3. test development and outside evaluation,
4. appraisal standard of competency and good lesson,
5. characteristics of competency-based lesson,
6. individualization tendency in inclusive lesson, and
7. combination between inclusive lesson and competency-based lesson.

研究分野：教育学

キーワード：ドイツ PISA 学力向上政策 教育方法改革

## 1 研究開始当初の背景

各種国際学力調査、とりわけ PISA の第 1 回調査結果（2001）の衝撃（PISA ショック）を受けて、ドイツでは大規模かつ急速な教育改革が進行している。PISA 型学力の向上ならびにそのための教育スタンダードの設定、これに基づく成果の検証と教育方法の改善、成果検証にかかわる教師の専門性の改善、成果志向の評価に基づく学校と授業の質の保障と改善、移民背景のある生徒を含んだ低学力生徒の学力向上、半日学校から福祉的側面をも含んだ終日学校への転換などの改革が進められている。こうした多様な分野で展開されている PISA 後のドイツ教育改革の特質は、「教育の質保障」の中核である「学力向上」のための改革として位置づけられる。また、教育実践上でその中心に据わるのは、学力向上政策と連動した教育方法改革である。わが国では、こうしたドイツにおける学力向上政策や教育方法改革に関する個別課題あるいは個別地域に限定した研究は少ない。しかしながら、両者の連動に焦点を当てた連邦・州・実践レベルでの総合的研究は見当たらない。

## 2 研究の目的

本研究は、教育改革の個別課題あるいは個別地域に特化するのではなく、PISA 後のドイツの教育改革を上記のように学力向上のための改革として位置づけ、国家・州・実践の各レベルにおけるその展開状況を明らかにするとともに、それと連動した教育方法改革の特質を析出することを目的とする。そのことによって、日本にとっての学力向上策と教育方法改革の今後の課題をも提起する。

## 3 研究の方法

連邦レベルの学力向上政策と教育方法改革に関しては、KMK（常設各州文部大臣会議）のこれに関わる文献や資料を収集し検討する。また、PISA 後のドイツ教授学研究の特徴的な理論的動向に関する文献研究も行う。他方、州・実践レベルに関しては、ドイツを東西南北に割り振った上で、主立った州・地域の取り組みや学校での授業実践を現地調査する。

## 4 研究成果

KMK の学力向上政策と教育方法改革に関して文献・資料の検討を行うとともに、PISA 後のドイツ教授学研究の特徴的な理論的動向も

整理した。他方で、ドイツの東部・西部・北部・南部の主立った州の取り組みや学校での授業実践を現地調査した。現地調査の対象は、ザクセン州の文部省・基礎学校・中等学校・ライプツィヒ市庁舎、ベルリン州のフンボルト大学「教育の質開発研究所」、テューリンゲン州のイエナ「コンピテンシーテストプロジェクト」オフィス、バイエルン州ミュンヘンの「学校の質と教育研究のための州立研究所」、基礎学校、ハンブルク州の「教育モニタリング・質開発研究所」、学校賞受賞校、ブレーメン州の文部省・基礎学校・総合制中等学校、ノルトライン・ヴェストファーレン州の文部省・「学校研究所-質・支援エージェント」・デュッセルドルフ学校監督庁・ウナ地区学務局・生徒会・実験学校、バーデン・ヴュルテンベルク州の文部省・チュービンゲンの学校監督庁・学務局・基礎学校・中等学校であった。また、大学研究者に対しては、ドリンク教授（ライプツィヒ大学）・アムライン教授（ビーレフェルト大学）・テアハルト教授（ミュンスター大学）・マイヤー名誉教授（ハンブルク大学）への聞き取り調査を実施した。

以上の文献・資料の検討ならびに現地調査の結果、主に以下の点を明らかにした。

(1)PISA ショックを起点としたドイツの教育改革は、「教育の質保障」の主眼目である学力向上を、教育スタンダードの開発・導入とその成果検証、テスト開発とその結果のフィードバック、低学力生徒の促進として具体化してきた。それと連動して教育方法改革に関しては、スタンダード内容の中心に据わるコンピテンシーに方向づけられる授業を提唱してきた。しかし他方、インテグレーションからインクルージョンへの転換を契機として、障がいを含んだ特別な教育的ニーズのある生徒の多様なニーズに個別に応答するインクルーシブな教育・授業も同時に追求してきた。ドイツの学力向上策と教育方法改革は、全体としてみれば、これらの三者の融合において理解される必要がある。

(2)ドイツの教育改革におけるインプットからアウトプット重視への転換は、学力評価にも反映されている。連邦レベルでは、「質開発研究所」が、教育スタンダードの達成状況を確認するためにテスト VERA を開発し、調査を行っている。これに対して、調査対象州では共通して、州の教育課程・教育計画の達成度の測定のために独自のテストを開発し、教育・授業の質改善のためのフィードバックを行っている。また、

その際のフィードバックの内容は、教育現場における「実質的な有用性」を重視するコンパクトなものから、フィードバック対象者(学校、学級、生徒、学校監督庁など)ごとにタイプ分けをして、条件的に類似した学校との比較や経年変化などの様々な観点を踏まえた綿密なものまで、多様である。さらに、たとえばバイエルン州やノルトライン・ヴェストファーレン州ではいずれもQAと略称される学校の外部評価が実施され、その内容の一環として「良い授業」があらかじめ想定されているという特色がみられる。

(3)学力評価の中心はコンピテンシーテストであるが、これに対しては、疑義も呈せられている。テスト担当者からは、測定困難なコンピテンシーは除外され、実際には個別の面談でしか評価し得ない内容がテストされ、テストの対象とすべきではない学習者の内心の自由にかかわる内容がテストされると危惧されている。また、教育研究者からは、測定内容が向上するだけであって、その意味では「効果的授業」ではあっても「良い授業」は想定されていないと指摘されている。さらに、生徒からは、教養よりも社会(会社)適応が目指されると懸念されている。これらは、PISA後におけるビルトウング(Bildung)からコンピテンシー(Kompetenz)への転換ならびに教育研究の実証主義的転回に対する批判という点で通底している。

(4)コンピテンシーテストは、おのずからそれを志向する授業につながる。「教育スタンダードを活用した授業の開発に関するKMKの構想」をはじめとして、各州コンピテンシー志向の授業の手引き、研究者によるコンピテンシー志向の授業のモデルが提起されてきた。調査対象の各州の学校の多くも、基本的には教育スタンダードの達成に主眼を置いたコンピテンシー志向の授業である。その特徴は、一斉学習ではなく、個別学習にあり、各生徒の多様な状況に応じた個別の到達レベル・学習内容・学習方法の下での学力形成実践にある。ただし、学習の共同性も配慮され、ペアやグループでの協同も部分的に実践されている。

(5)全体としてみればコンピテンシー志向の授業に変わりはないとはいえ、さらに各州の外部評価項目中にある「良い授業」の指標に目を向ければ、その理論的基礎において差異が認められる。伝統的な教授学研究(ノルトライン・ヴェストファーレン州)か実証主義的研究(ザクセン州)かの差異である。その背景には、ビル

ドゥングとコンピテンシーのいずれを重視するかの差異がある。しかし、それにもかかわらず、指標レベルでは奇妙な類似性が認められる。

(6)インクルーシブ教育・授業に関しては、障がいのある生徒を対象とする「狭義のインクルーシブ教育」理解・実践と移民背景を含んだ多様な生徒を対象とする「広義のインクルーシブ教育」理解・実践の間の相違はあるが、教育方法としては、特別なニーズのある生徒への個別支援が他の生徒の指導とともに同一の教室空間のなかで展開されているという共通特徴がある。ただし、インクルーシブ授業では、とりわけ社会福祉士やスクールソーシャルワーカーなどとの協働による支援体制が整えられている。

(7)コンピテンシー志向の授業とインクルーシブ授業は、前者が教育スタンダードの達成から要請され、後者はインテグレーションからインクルージョンへの転換から提唱されているという経緯の違いはあるものの、実際の授業は両者の融合のなかで実践されている。その融合内容は、生徒が主体的に活動的に取り組む学習、生徒の多様性をふまえて目標・内容・方法を個別化した学習、個別化を前提としながらもペアやグループ活動による学習の共同場面の設定に顕著にみられる。

以上が、本研究で明らかにしたごく主立った成果であるが、同時にさらに今後検討を要する課題も浮かび上がった。第1に、学力としてのコンピテンシーが社会から要請される「資質・能力」なのか、それとも未来を生きる生徒にとって必要とされる「資質・能力」なのかという視点から、そのありようを検討するという課題である。第2に、教育スタンダードの設定・運用と学校・教師の自律性や教育の自由・多様性の保障との関連が、カリキュラム・マネジメントをはじめとした各学校の学校づくりでいかに追求されているのかを具体的に調査するという課題である。第3に、生徒が主体的に活動的に取り組む学習、生徒の多様性をふまえた目標・内容・方法を個別化した学習、個別化を前提としながらもペアやグループ活動による学習の共同場面の設定を追求する授業では、どのような多様性と共通性の関連が求められているのかを問い直すという課題である。第4は、したがって、学習における個と共同との関係性の内実を検討するという課題である。本研究のこれらの今後の課題は、ドイツにとどまらず、今日の日本の学力保障と教育方法改革にとつ

ても不可避であるといえる。

なお、本研究の成果として『PISA 後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革』（2014~2016 年度科学研究費補助金：基盤研究(B) 海外学術調査最終報告書、研究代表 久田敏彦、2017 年 3 月)を刊行した。本「研究成果」の内容は、同報告書中の高橋英児・久田敏彦「ドイツにおける学力向上政策と教育方法改革の特質 研究成果の概要」に依拠するものである。

## 5 主な発表論文等

[雑誌論文](計 40 本)

高橋英児「ドイツにおけるコンピテンシー志向の授業論に関する一考察」『山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要(No.21)』、2016、11-24 頁。

吉田成章「PISA 後ドイツのカリキュラム改革におけるコンピテンシー (Kompetenz) の位置」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部(教育人間科学関連領域)』第 65 号、2016、29-38 頁。

清永修全「教育改革ただ中のドイツより—学力向上政策と教育の質改善に携わる諸研究機関訪問記—」『東亜大学紀要』第 21 号、2015、43-51 頁。

高木啓「ドイツにおける学力向上プログラムに関する一考察 - 'SINUS an Grundschule'を例にして - 』『千葉大学教育学部紀要』第 63 巻、2015、175-179 頁。

樋口裕介・熊井将太・渡邊眞依子・吉田成章・高木啓「PISA 後ドイツにおける学力向上政策とカリキュラム改革—学力テストの動向と Kompetenz 概念の導入に着目して—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CD-ROM 版)第 60 巻、2015、368-379 頁。

久田敏彦「ドイツにとっての PISA」民主教育研究所編『人間と教育』No.84、旬報社、2014、30-37 頁。

[学会発表](計 7 件)

高橋英児「ドイツにおけるコンピテンシー志向の授業論に関する一考察」日本教育方法学会第 51 回大会、岩手大学、2015 年 10 月 11 日。

吉田茂孝「インクルーシブ教育におけるフォイザー(Georg Feuser)の教授学の構

造—カリキュラムの視点を中心に—」中国四国教育学会第 67 回大会、岡山大学、2015 年 11 月 15 日。

吉田成章「PISA 後ドイツにおけるコンピテンシー (Kompetenz) の位置」日本教育方法学会第 51 回大会、岩手大学、2015 年 10 月 11 日。

樋口裕介・熊井将太・渡邊眞依子・吉田成章・高木啓「PISA 後ドイツにおける学力向上政策とカリキュラム改革—学力テストの動向と Kompetenz 概念の導入に着目して—」中国四国教育学会第 66 回大会、広島大学、2014 年 11 月 16 日。

[著書](計 3 件)

末松裕基編著『現代の学校を読み解く—学校の現在地と教育の未来—』春風社、2016、297-331 頁(辻野けんま「ドイツの学校は国家とどう付き合ってきたか」、ハンナ・キーパー、吉田成章編『教授学と心理学との対話—これからの授業論入門—』溪水社、2016、211 頁。

## 6 研究組織

(1) 研究代表者

久田 敏彦 (HISADA, Toshihiko)  
大阪青山大学・健康科学部・教授  
研究者番号：70135763

(2) 研究分担者

中山 あおい (NAKAYAMA, Aoi)  
大阪教育大学・国際センター・准教授  
研究者番号：00343260

清永 修全 (KIYONAGA, Nobumasa)  
東亜大学・芸術学部・教授  
研究者番号：00609654

藤井 啓之 (FUJII, Hiroyuki)  
日本福祉大学・経済学部・教授  
研究者番号：70253044

高橋 英児 (TAKAHASHI, Eiji)  
山梨大学・大学院総合研究部・准教授  
研究者番号：40324173

高木 啓 (TAKAKI, Akira)  
千葉大学・教育学部・准教授  
研究者番号：90379868

辻野 けんま (TSUJINO, Kemma)  
上越教育大学・学校教育研究科・准教授  
研究者番号：80590364

吉田 茂孝 (YOSHIDA, Shigetaka)  
大阪教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：60462074

吉田 成章 (YOSHIDA, Nariakira)  
広島大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号：70514313

渡邊 眞依子 (WATANABE, Maiko)  
愛知県立大学・教育福祉学部・准教授  
研究者番号：60535285

樋口 裕介 (HIGUCHI, Yusuke)  
福岡教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80587650

熊井 将太 (KUMAI, Schota)  
山口大学・教育学部・講師  
研究者番号：30634381